

文化の丘

令和3年 9月号
(ISSN 1345-2282)

No.370

- 1 こんにちは館長です
- 2 渋谷栄一と
静岡県立中央図書館
- 3 昔へいざない
- 4 静岡県の図書館 Snap Shot!

こんにちは 館長です

早いもので私が着任してから3か月が過ぎようとしています。図書館の辺り一面をピンク色に染めていたサツキの花もいつのまにか姿を消し、この原稿を書いている今では草木の緑がその濃さを増しています。

さて、県立中央図書館は今、大きな変化の時を迎えています。そのひとつの要因は、言うまでもなく新県立中央図書館の整備です。建物の耐用年数を考えると「百年に一度の変革」と言っても決して過言ではありません。

新図書館については平成29年度から着々と整備に向けた準備が進められており、昨年度には「新県立中央図書館整備計画」¹⁾が策定されました。この計画では想定規模19,600㎡程度、概算事業費180億円程度、令和8年度施設完成といった具体的な数字も示され、いよいよ新しい図書館整備に向けた動きが現実的になってきたことを実感しています。

導入される機能で注目すべきは、やはりこれまでの県立中央図書館になかった「新しいタイプの図書館機能」の部分ではないでしょうか。整備計画では、映像や展示といった多彩なメディアから静岡県の様々な情報を得ることができる「情報発信コーナー」、テーマごとに専門書から雑誌、マンガまでも備える「テーマ別配架コーナー」、多数の来館者を対象としたオープンなイベントを実施したり、自由な交流の場として常に開放され情報交換や議論を通して理解を深める場である「オープンコラボレーションスペース」、講演会、発表会、講座など一定の人数以上のイベント等で利用される「多目的ホール」などがイメージ写真とともに紹介されています。これらを見るだけで、多くの人たちが集まり、交流が生まれ、多様な化学反応が起きることで新たな文化が創り出され発信されていく、そのような知的創造空間としての賑やかな景色が思い浮かびわくわくしてきます。そしてこの機能は、その時々々の要請に応じながらより良いものへとありようを変え続けていくことでしょう。

一方で、いつの時代においても図書館として守っていかなければならない役割や機能もあります。図書館は、人類のこれまでの営みの中で生み出され蓄積されてきた知的財産の宝庫です。こうした貴重な資源や情報を提供し利用いただくことで県民の皆様の「調べる、考える、解決する」を支援することが当館の基本方針の礎になっています。これを実現するために、県立中央図書館ならではの資料を幅広く収集し、利用者の皆様の「知りたい」に迅速かつ的確に応えることができるようレファレンスサービスの充実を図り、市町立図書館の活動をしっかりと支えることなどがこれからも求められます。新たに整備される図書館においてもこうした役割、機能については継承しつつ更に発展させていきます。

新県立中央図書館整備に向けた動きが進展する中、根幹となる部分を大切にするとともに時の流れや人々の価値観の変化に応えながら常に進化していく、いわば図書館における「不易流行」ということを改めて考えています。



静岡県立中央図書館長
赤石 達彦



¹⁾「新県立中央図書館整備計画」は静岡県公式ホームページに掲載されています。左記の二次元バーコードからご覧いただけます。

渋沢栄一と静岡県立中央図書館

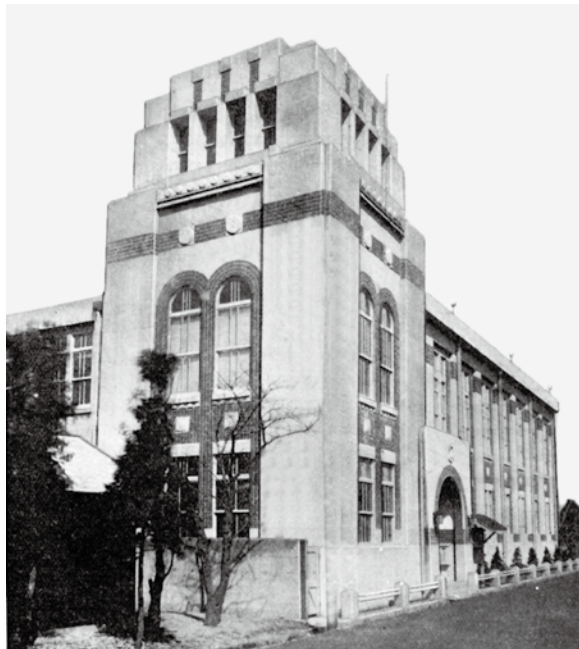
2024年から使用される新しい紙幣の顔でもあり、今年のNHK大河ドラマの主人公でもある、渋沢栄一。パリから帰国した栄一は静岡藩に仕官します。静岡在住は10か月程度でしたが、新政府に招かれ、静岡を去った後も様々な分野で静岡のために力を尽くしました。今回は、静岡県立中央図書館に関する渋沢栄一の功績を紹介します。

○葵文庫の創立に尽力した

静岡県立中央図書館の前身である静岡県立葵文庫は、徳川家記念事業として、総工費17万円²⁾をかけ、大正14(1925)年4月、静岡市追手町248番地³⁾に開館しました。

大正8(1919)年、図書館設立を決意した当時の県知事、關屋貞三郎は、費用の大部分を寄附で賄うことにして、渋沢栄一に話を持ち掛けます。栄一は、自分が1万5000円⁴⁾の寄付をしただけでなく、徳川家をはじめ、東京に住んでいた静岡県出身者に対して熱心に寄付を呼び掛けました。おかげで県は、当初想定された金額15万円を大幅に超える費用を確保することができました。

その後、大正10(1921)年11月議会の議決を経て設計に着手しました。しかし、大正12(1923)年9月の関東大震災により、起工が遅れて同年12月になり、講堂等全ての建物が完成したのは開館の1か月前でした。



『静岡県立葵文庫記念写真帖』より(S010/17)

○なぜ、静岡のために尽くしたのか

大正15(1926)年に発行された『葵文庫ト其事業』第2号(SZ01/12)には、「葵文庫の設立と渋沢子爵」として、文庫長の貞松修蔵が栄一から聞いた談話が掲載されています。

この中で、栄一は葵文庫の設立に尽力した理由を2つ挙げています。1つ目に、鎌倉時代以降の日本では、武芸が尊重されたため、学問や文芸は疎んじられるようになりました。しかし、江戸時代に駿府で暮らした家康が、林羅山など、一流の人々に進んで師事したり、朝鮮から輸入し独自に開発した銅活字を用いて国書の復刻、印刷、収集を行ったりするなど、文武を奨励する幕府の方針を確立したため、漢学、国学が振興します。その功績をたたえ、葵文庫を近代文化史の記念塔とするべく設立に尽力したと語っています。

2つ目は、幕末の争乱や外国からの干渉が激しかった明治大正時代の日本が、大きな混乱もなく発展できたのは、慶喜が大政奉還後に静岡で蟄居し、国家の安泰を願い、あえて政治に関与しなかったからだとして栄一は主張し、これを記念するため葵文庫設立に尽力したと語っています。一橋家の家臣から当時の地位を築いた栄一にとって、慶喜の存在がいかに大きいものであったか分かります。

寄附者	
金五萬圓	熊澤一衛氏
金參萬圓	徳川家達氏
金貳萬圓	徳川慶光氏
金壹萬五千圓	澁澤榮一氏
金壹萬圓	大川平三郎氏
圖書貳千五百六冊(故齋吉氏遺書)	植村澄三郎氏
圖書三百六十六冊	關口壯吉氏
金百圓	大石勝太郎氏
	狩野辰男氏

『静岡県立葵文庫概要』より(S010/40)

葵文庫の文庫長が、大正十五年(一九二六)年五月に東京市飛鳥山(現在の東京都北区飛鳥山公園)の渋沢栄一を訪ねました。

『葵文庫ト其事業』第2号(SZ01/12)

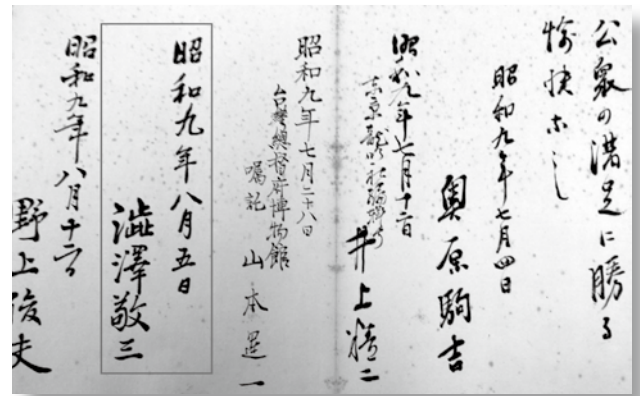


画像は「ふじのくにアーカイブ」でもご覧いただけます。

- 2) 現代の金額でおおよそ4億7500万円
- 3) 現在の県庁東側付近
- 4) 現在の4200万円相当

インタビューの中でも語っていましたが、栄一自身は葵文庫への訪問を強く希望していました。しかし、残念ながら高齢と病気のため訪れることはできませんでした。その代わりにでしょうか、昭和9(1934)年には栄一の孫で、後継者の渋沢敬三が当館を訪れています。

開館当時の芳名録⁵⁾には、著名人の名も多く遺されており、葵文庫が多くの人々に注目されていたことをうかがい知ることができます。



『芳名録』(S010/66/1~4)



『徳川慶喜公傳』(289.1/19-2)

○栄一が世に送り出した『徳川慶喜公傳』

明治26(1893)年頃から、栄一は主君だった徳川慶喜の功績を正しく後世に伝えたいと考えていました。そこで、著名な小説家や歴史学者に協力を仰ぎ、25年という長い年月をかけ、大正7(1918)年に『徳川慶喜公傳』を出版します。本編4冊と年譜や書簡等が掲載された附録が3冊、索引1冊の全8巻からなる大作です。第1巻の序文では、パリ留学中に起きた大政奉還や静岡における慶喜の様子を振り返っていて、当時の栄一の心情をうかがうことができます。しかし、残念なことに編纂当時の資料は、関東大震災で焼失してしまいました。

この本の表紙には、徳川家の家紋が金箔で押され、裏表紙には渋沢家の家紋である「丸に違い柏」が型押しされています。本の装丁にも栄一の慶喜への想いが込められています。

裏表紙にひっそりと押された渋沢家の家紋、ぜひ実物をご覧ください。

5) 『芳名録』全部で4冊あり、渋沢敬三は3冊目に登場する。

いんくろ 歴史文化情報センター 昔へ いざない

昭和15(1940)年11月24日、内閣総理大臣、最後の元老として国政に関与した西園寺公望公が興津の坐漁荘にて薨去してから約80年が経ちました。今回は興津における西園寺公の様子を紹介します。

西園寺公と興津

西園寺公は戊辰戦争へ従軍、ヨーロッパでの憲法調査、ヴェルサイユ条約調印に関わり、また元老として内閣総理大臣を推薦し、近代日本の政治に大きく関わりました。大正5(1916)年の冬に興津を訪れた西園寺公は気候温暖で風光明媚な清見瀉を気に入り、別荘を建てることを思い立ったと言われています。「坐漁荘」の名前には“なんせず、のんびり坐って魚をとって過ごす”という意味が込められていたようですが、上述のように首相の選任に関わり、坐漁荘を訪れる政府要人が後を絶たなかったといわれています。

興津での西園寺公の様子は当時の新聞から読み取ることが

できます。岡田啓介首相が坐漁荘を訪れて談笑したこと、病気の西園寺公を心配した人たちが坐漁荘前で合掌し、見舞客が続々到着したことといった記事があります。二・二六事件の際には坐漁荘から静岡県知事公舎に避難し、時局收拾のために上京した記事もあり、当時の緊迫した様子が伝わってきます。

傷みが激しかった坐漁荘は、昭和46(1971)年に愛知県明治村に移築され、修理工事後、平成29(2017)年に国の重要文化財に指定されました。西園寺公が住んでいた興津の地には現在、忠実に再現された坐漁荘が一般公開されています。大正8(1919)年に坐漁荘が建てられてから約100年、この機に坐漁荘を訪れ、想いを巡らせるのはいかがでしょうか。



坐漁荘址
(歴史文化情報センター所蔵)



2020.10.8 浜松市立佐久間図書館



2020.11.6 静岡市立薬科図書館



2021.3.11 島田市立島田図書館



2020.10.13 磐田市立福田図書館



2020.10.13 掛川市立大須賀図書館



2020.6.24 富士宮市立中央図書館

市町立図書館の振興のために、県立中央図書館は以下の事業を行っています。

- ▷ 協力車による運営相談や地域館・分館訪問を行い、図書館運営についてヒアリングや助言を行います。
- ▷ 各図書館の間で資料を貸し借り（相互貸借）する際の、情報と物流のネットワークを提供します。
- ▷ 各図書館で働く職員のスキルアップのため、公立図書館等職員研修を企画・運営します。
- ▷ 専門的な資料を収集し、市町立図書館の求めに応じて貸出（協力貸出）します。